

昭和天皇——母との確執

原 武 史

裕仁、すなわち昭和天皇が死去して、もうすぐ 20 年がたとうとしている。平成の世になり、新たな史料が次々と公開または刊行されたことで、昭和天皇研究は格段に進んだかに見える。

だが、研究の主流は、依然として昭和天皇の政治的側面に光を当てようとするものである。そこには、「戦前」と「戦後」の断絶が、暗黙の前提になっている。大日本帝国憲法下では「統治権の総覧者」であり、立憲君主として政治的意思を有していた天皇が、敗戦後は日本国憲法のもとで「象徴」となり、すべての政治的権能を失ったとする、周知の前提である。最近戦後の象徴天皇制のもとでも、天皇は内奏という戦前以来の慣習を続けることで、政治的意思を表明し続けたとする研究も増えてきているが、天皇の政治的側面にこだわっているという点では同じである。

私に言わせれば、これらはあくまで、「お濠の外側」の天皇を見ているにすぎない。そうではなく、これまでほとんど注目されてこなかった「お濠の内側」に着目することで、「戦前」と「戦後」を一貫する昭和天皇の姿を、よりはっきりした形でとらえることができるというのが私見である。

「お濠の内側」というのは、単なる天皇の住まいとしての皇居（1948 年までは宮城）だけを指しているわけではない。実はここには、宮中三殿という、天皇家にとって最も神聖な空間がある。伊勢神宮にある神鏡の分身が安置された賢所、歴代天皇や皇族の霊を一括してまつる皇霊殿、天神地祇を一括してまつる神殿を主な建物とする宮中三殿は、1888（明治 21）年に完成して以来、今日に至るまで、天皇家が行う祭祀、すなわち宮中祭祀の舞台となってきた。昭和天皇は、1919（大正 8）年に成年式を迎えてから、1986（昭和 61）年に最後の新嘗祭を行うまで、一貫して祭祀を行い、祭祀に出席し続けたのである。

ではなぜ昭和天皇は、敗戦により体制が大きく変わったにもかかわらず、宮中祭祀を続けたのか。この問いに答えるためには、母親の節子、すなわち貞明皇后に着目する必要がある。

拙著『大正天皇』（朝日選書、2000 年）で触れたように、嘉仁、すなわち大正天皇は、もともと公務が好きでなく、プライベートな旅行や御用邸での静養を好む性格の持ち主であった。その性格は天皇になってからも受け継がれる。私的な静養を全くしなかった明治天皇とは対照的に、大正天皇は葉山や日光の御用邸に、毎年夏や冬に長期滞在するようになる。しかも、一夫一婦制を宮中で初めて確立させた大正天皇らしく、必ず妻の貞明皇后と一緒に滞在した。

この間、天皇と皇后は基本的にずっと東京を留守にしていたため、宮中祭祀にも出ないことが多かった。皇太子時代にいったん回復した大正天皇の体調は、天皇になるや再び崩れてゆく。とりわけ 1919 年以降になると、天皇が脳病を患っていることが明らかになる（『原敬日記』8）。

言うまでもなくこのことは、皇后に大変な衝撃を与えた。大正天皇は公務や祭祀を行うことが全く不可能になり、1921 年に裕仁皇太子が摂政になると引き換えに、事実上引退する。皇后はその翌年、香椎宮、箱崎宮、太宰府神社（現・太宰府天満宮）、厳島神社、住吉大社を巡拝し、天皇の回復

を祈願する。その背景にあったのは、天皇ばかりか皇后である自分も一緒になって私的な静養を優先させたために、神罰が当たったという悔恨の気持ちではなかったろうか。

このため貞明皇后は、摂政となった裕仁に対して、宮中祭祀をきちんとやるよう、厳しく注文するようになる。裕仁は摂政になる前、1921年に半年間にわたってヨーロッパを訪問し、帰国後に摂政になると、江戸時代の大奥の残滓というべき後宮制度（いわゆるお局）を改革し、女官の数を大幅に減らして通勤制に改めようとした。ところがこれに対しては、住み込みの女官が必要な宮中祭祀を軽んじるものだと、皇后が激しく反発した。皇后は、関東大震災のため24年1月に延期された裕仁と久邇宮良子の結婚についても、裕仁が新嘗祭をきちんと行えなければ認めないという態度をとった（『牧野伸顕日記』）。

1925年以降、貞明皇后は、法学者の寛克彦が唱える「神ながらの道」に入り、神がかりの傾向を一層強めてゆく。26年に大正天皇が死去し、裕仁が天皇になると、節子は皇太后となり、多くの女官とともに青山東御所、そして大宮御所に移り住む。28（昭和3）年11月の即位大礼の前に、皇太后は再び、「形式」だけにとどまる昭和天皇の祭祀の仕方を批判し、このままでは神罰が当たると警告する（『倉富勇三郎日記』）。

この母子対立は、太平洋戦争末期まで続いた。なぜ昭和天皇は、1945年6月まで、はっきりとした戦争終結の態度をとることができなかったのか。それを解く一つの鍵もまた、この母子対立にあるように思われる。45年1月18日、皇太后は高松宮妃喜久子に「ドンナ二人ガ死ンデモ最後マデ生キテ神様ニ祈ル心デアル」（『高松宮日記』第8巻）と話し、その4日後の歌会始では、「かちいくさいのるとまゐるみやしるのはやしの梅は早さきにけり」（『貞明皇后御歌集』）と詠んでいるのである。心から神に祈れば必ず勝てるという皇太后の強い信念が、昭和天皇を束縛していたのは想像に難くない。

敗戦後、昭和天皇はアマテラスに戦勝を祈ったことを反省し、改めて平和を神に祈ることを誓う。天皇が戦後も祭祀にこだわったのは、こうした懺悔の念からであった。皇太后が51年に死去してからも、天皇の気持ちに変化はなかったと思われる。なお、本報告は、2008年1月に刊行した『昭和天皇』（岩波新書）がもとになっている。